

ごんぎつねとは

新美南吉作の児童文学。初出は「赤い鳥」1932年1月号。作者の死の直後に刊行された童話集『花のき村と盗人たち』に収載された。新美南吉の出身地である愛知県知多郡半田町（現在の愛知県半田市）岩滑地区の矢勝川や権現山を舞台に書かれたといわれている。「城」や「お殿様」、「お歯黒」という言葉が出てくることから、江戸時代から明治にかけての物語と考えられている。



あらすじ

両親のいない小狐のごんは、村へ出てきてはいたずらばかりして村人を困らせていた。ある日ごんは、村人の兵十が川で魚を捕っているのを見つけ、兵十が捕った魚やウナギを逃すといういたずらをしてしまう。

それから10日ほどあと、兵十の母親の葬列を見たごんは、あのとき逃がしたウナギが、兵十が病気の母親のために用意したものだと悟り、後悔する。母を失った兵十に同情したごんは、ウナギを逃がしたつぐないとして、いわしを盗んで兵十の家に投げ込んだ。翌日、いわし泥棒と間違われた兵十はいわし屋に殴られていた。それを知ったごんは、自分の力で償いをしなければ

ばと思い直し、山から栗や松茸を運び兵十の家へ届けた。しかし兵十は、毎日届く栗や松茸が誰のしわざかわからず、加助の助言で神様のおかげと思いつく。それを聞いたごんは、たまらなく寂しい気持ちになってしまう。

その翌日兵十は、ごんが忍び込んだ気配に気づく。そして、またいたずらに来たと思込む。兵十は母親にウナギを食べさせられなかった復讐心から、ごんを火縄銃で撃ってしまう。

ごんのそばに駆け寄ると、土間に栗がまどめて置いてあった。そこで初めて、栗や松茸は、ごんが運んでくれたと気づく兵十。

「ごん、おまえだったのか。いつも、栗をくれたのは」と問いかける兵十に、ごんは目を閉じたままうなずき返す。悲しみに暮れる兵十は、手に持っていた火縄銃を床に落としてしまう。



上保節子さんの指導に真剣に耳を傾ける子どもたち。でもみんな、どこか楽しげだ。

大切なのは、登場人物になりきって演じること
そのためには物語を良く読み、その世界にひたること
セリフ一つにも、物語を楽しんだ気持ちが表れる

上保さんは幼少時代、ここ川根本町の藤川地区で育った。そのころ観た劇団たんぼの劇が強く心に残っていると語る。「小学生のころ、劇団たんぼが公演に来ると聞いては、見に行っていました。15円を握りしめ、万世橋を渡って、友人と一緒に徳山まで通いました。そのころ見た演劇に感動し、今のわたしがあります。現在は劇団の代

物語に親しむ心を育てたい

この間にも、上保さんの熱心な演劇指導が続いている。上保さんは、子どもたちの思いが、どうやったら観客に伝わるのか、プロの技術をあますこととなく子どもたちに伝え、教えていた。ときには「この場面は、どうやったらいいと思う？みんな考えてみよう」と子どもたちに言葉をかけ、児童の自主性を育てることも大切にしていた。「常に自分たちで考え、工夫することを忘れてはいけません。セリフの強弱一つとっても、観客への伝わり方は変わります。どうやったら伝わる演技ができるのか。そのためには、自分なりに物語世界を想像し、考えることが大切なんです。いろいろ試すことで、本当に言いたい部分が見えてくる。伝わる言葉になる。それを繰り返すことで、物語への理解が、より一層深まっていくんだと思います。」



劇団たんぼ代表 上保節子さん（浜松市）

表として、団のスケジュール管理や事務方・裏方全般をこなしながら、こうした演劇指導の仕事をしています。子どもたちの良い面を育ててあげたい。演劇を通して物語の世界の楽しさを味わって欲しいと話す上保さんが、指導をする際、一番気を付けているのが「楽しむ」ことだ。「登場人物を演じる上で一番大事なのは『物語を読み取る力がどれだけあるか』ということ。つまり、その物語に、自分がどれだけ入り込み、楽しみ、登場人物の姿を自分なりに想像・創造できるかということ。この子どもたちはとっても素直。指導をすんなり受け入れてくれます。教わりたい、楽しみたいという心がちゃんと備わっている証拠だと思います。」劇の練習は続いている。子どもたち一人一人が登場人物になりきり、「ごんぎつね」の世界に没頭していた。

劇団たんぼ 1946年設立。故小百合葉子さん（浜松市）が「子どもたちに夢を与えたい」と願い誕生した劇団。北海道から沖縄まで、全国で通算38,000回もの公演を重ね、海外での公演も成功させている。上保節子さんは2005年、劇団代表に就任。

演じることで深まる
「物語」への理解

名作「ごんぎつね」を劇で
中川根第一小4年生が挑戦

「とてもいい声が出るよ。あとは体育館の後ろの人にも聞こえるよう、もっと大きな声で話してみよう。」上保節子さんの声が飛ぶ、1月29日の中川根第一小体育館。2月6日のなかよしの森発表会に向けて、各学年、劇の練習が佳境を迎えていた。練習に立ち会っていた松本晴巳校長に話を聞いた。「発表会に向け、プロの人から学ぼうと、文科省の芸術家派遣事業を利用し、上保さんに来ていただきました。劇団たんぼの団員として

長く舞台に立った上保さんから、演劇のノウハウや役作りする上での心構えなどを教わっています。4年生は、教科書に登場する児童文学の名作『ごんぎつね』を上演します。登場するきつねの動作やセリフ一つ一つでも工夫する余地があり、本の世界を想像する上で大切なことを学ばせてもらっています。今回上保さんには、1年生から6年生まで、すべての学年の指導をしていただきました。プロの視点、意識の深さに触れ、『人に思いを伝えることの大切さ』を知ることができたのではないかと思います。ぜひ来年以降も続けていきたいと考えています。」

中川根第一小4年生8人は2月6日の学習発表会で児童文学の名作「ごんぎつね」の劇に挑戦。上演にあたり、プロから必要な知識や技術、心構えなどを学ぼうと、劇団たんぼの上保節子代表の指導を受けた。観客に伝わる演劇とはどういったものか。上保さんは、「役になりきることで、どれだけ物語に入り込めるかが大切」と説いた

